



アートリンク
うちのあかり

うちのあかり事業報告2024

Uchi no Akari Annual Report 2024



うちのあかり事業報告2024

Uchi no Akari Annual Report 2024

目次	
新屋地域マップ	02
うちのあかり事業内容	04
たきびつこのひとびと	06
座談会「うちのあかりと地域の未来図」	08

アトリリンクうちのあかりは、障がいのあるひと、生きづらさを抱えるひとが自由に表現活動をする場として、ここ新屋地域に2018年に開設されました。多様な背景を持つひとの表現に関する研究、創作活動に関する調査・情報収集等続けながら、展覧会「あきたアートはだしのころ」や「作品ホームステイプロジェクト」などの事業にも取り組み、新屋地域を拠点にさまざまな活動を続けています。

この地で、ここで、生きること。安心して、ここで暮らすこと。ここが、よりよい居場所であるように。

ありのままの〈自分〉でいられるように。





県道65号線

日吉坂通り

県道56号線



うちのあかり

障がいのあるひと、生きづらさを抱えて心細いおもいをしているひと、学校や施設に気持ちが向かないひとなどがアートを通してつながり合う居場所(地域活動支援センター)。学生や障がいのあるひと、うちのあかりに集うさまざまなひとが関わり合うことで地域ケアのコミュニティを上げていく。秋田公立美術大学の学生たちがサポートの中心を担い、学生にとっての居場所にもなっている。

旧石野呉服店

表町通りに構える築70年の町家づくりの建物を使わせていただき、エクステンジ(洋服の交換会)やブックスワップ(絵本の交換会)などを開催。

たきびっこ広場

新屋ガラス工房の裏手に位置する、日新保育園跡の広場。草刈りをしたり、雪寄せをしたりして維持しながら毎月第2日曜に「たきびっこ」を開催する。焚き火を媒介に、地域に暮らすさまざまな人が交差し、関わり、つながり合える、安心できる場として継続。

斜向かいのアトリエ

障がいのある人や秋田公立美術大学の学生らが、何かを制作したり、対話したり、思い思いの時間を過ごす共同アトリエ。

秋田公立美術大学

社会の大きな変動に呼应し、古い概念にとらわれることなく新しい芸術領域の創造に挑戦する大学として開学。「まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学」を基本理念のひとつとし、地域におけるさまざまな活動によってつながりが醸成されている。

多様なひとびとが、共に、さまざまに、ありのままの〈自分〉でいられる場所に。

日本海にそそぐ雄物川河口の左岸に位置し、羽州浜街道の宿場町として栄えた新屋地域。地下水が豊富で、湧き出る良質な水を源とする酒蔵や味噌・醤油、魚醤等の醸造元、うどんや白玉の製造元、さらに数多くの商店がかつてこの地に軒を連ねていました。新屋表町通り近辺には、町家形式の建物や蔵、古くからの社寺などの歴史的な建造物がいまも点在しています。うちのあかりは、ここ新屋地域を活動の拠点として、本拠地である「アートリンクうちのあかり」、「斜向かいのアトリエ」の整備・運営、月に一度の「たきびっこ」や「旧石野呉服店」でのイベントなどさまざまな活動に関わり、多様なひとびとがつながり合う地域ケアのコミュニティを展開しています。

表現

あきたアート はだしのころ
(2024年2月10～17日、旧松倉家住宅)

生きる営みの中から真っ直ぐに生まれてきたアートを、障がいのある人、ない人、すべての人で分かち合う場として2015年から開催する展覧会です。2024年の「はだしのころ」は、秋田県指定有形文化財の「旧松倉家住宅」を会場に、「みんなのはだしのころ」(応募作品の展示)と「はだしのスクラッチ」(感覚の対話)の2本立てで開催。「はだしのスクラッチ」では、誰かの傷(スクラッチ)を見たときに自然と溢れ出る感覚と対話して生まれた音や言葉を記録しました。



はだしのころウェブでは、はだしのころをもった作り手の作品やインタビュー等を公開

表現

作品ホームステイプロジェクト

秋田県内在住の障がいのあるアーティストが制作した作品を身近な場に展示していただくプロジェクト。アートのちからで人をつなげ、地域を活性化させたいとの思いから企画しています。2024年度は、秋田信用金庫新国道支店様、株式会社八森運輸様、コミュニティケア大内様に展示させていただきました。



声を上げられずに孤立しているひとたちが、アートと対話を手がかりとして、地域の中で生きる居場所をつくります。

うちのあかりの活動は、福祉制度や教育制度の枠組みからこぼれ落ちてしまい、

【展覧会やイベントへの出展、参加】



アートルンクうちのあかり展 (2024年9月12～21日、平山はかり店)



新屋ガラス工房の広場で開催された新屋発! ダンスとアートの祭典! 「オモテフェス」出展 (2024年6月1～2日)



新屋表町界隈でまちと手作り品を楽しむイベント「#ものまちなさんぽ〜」では、斜向かいのアトリエでワークショップを開催 (2024年4月13～14日)



はじまりの美術館開館10周年企画「き・てん・き・てん」に、うちのあかりの仲間・戸嶋諒さんが出展(夏会期 2024年8月3日～10月20日、はじまりの美術館)

場

さまざまなひとがつながり合う
新屋地域に広がる居場所

場

対話



うちのあかり
日々さまざまな出会いがある居場所。長く映画のスクールカメラマンとしてご活躍されていた長浜谷晋氏が撮りためた「うちのあかり」の日々の記録はこちら。



斜向かいのアトリエ
うちのあかりの仲間たちが黙々と制作をしたり、音楽を聴いたり、お茶やお菓子を食べてりしておだやかに過ごせる空間として、また、新屋地域との接続地点ともなる居場所「#ものまちなさんぽ〜」「たきびっこ」では会場に。



衣類の無料交換会
「xChange～服と幸せのシェア～」
「自分ではもう着ないけれど、誰かが喜んで着てくれるかもしれない服」を持ち寄る交換会。



旧石野呉服店
「BOOK SWAP AKITA 絵本の交換会」
地域の皆様からいただいた絵本や児童書を循環させるイベント。返却不要のこどもの絵本・児童書の図書館でもあります。交換会のほか絵本の読み聞かせなども。



新屋地域に溶け込む居場所
「たきびっこ」
毎月第2日曜、旧日新保育園跡地

対話

「きくこと」「はなすこと」のつどい
—共に生きるための会話についての会話
(2024年8月17日、秋田市文化創造館)



東北地域に「対話」実践のゆるやかなネットワークが育っていくこと、暮らしの中に安心できる対話の場があることを願って企画したイベント。テーマである「リフレクティング」とは、「きく(自分との会話、あるいは自分の内なる他者との会話)」「はなす(他者との会話)」の二種の会話を重ね合わせ、映し込みながら展開していく(すなわち、会話について会話する)ための方法。当日はリフレクティング研究と実践の第一人者である矢原隆行氏を迎え、共に「きくこと」「はなすこと」の会話を重ね合わせたつどいの場となりました。

たきびつことひとびと

写真：伊藤靖史
Creative Peg Works



いろんなひとがいる
良さ、難しさ。
粹のない、心地よさ。

自分の気持ちに一度に、正直に生きていたい。好きなものを否定されず、深めたり、シェアしたりしたい。うちのあかりは、それを叶えられる、大切な場所。(O)



うちのあかりでは、みんなの日常の中に入らせてもらっている感覚で過ごしています。スタッフも、遊びに来るひと、みんな不器用なひとの集まりなのかなと思っています。(M)



いくつか、夢がある。いろんな人と出会って、ちからを借りながら、1個ずつ、かなえていきたい。(N)



うちのあかりがなければ、行き場がない。否定しないでいてくれるところって、なかなかないんです。(T)

ずっと、居場所を探していた。

うちのあかりの仲間を見ていると、こんなこともするんだと日々発見がある。自分は、自分に限界を設定していたのかもしれないと、生きる態度に気づいたりする。(Y)



たきびつことには、うちのあかりの仲間も、知らない人も、学生さんもふらっと立ち寄っていく。うちのあかりと地域との間にある「場」なのかな。すでにあるかもしれない関わりが、濃くても薄くてもなく見えてくるような「場」になればいい。(M)



うちのあかりは、気にしなくていい場所。やってみたいことができる場所。大事な場所。いろいろな人と関わりを持つことが楽しいから、たきびつことも好き。ここでいろんな人に出会いたい。(N)



地域の奇り合いのような場が生まれたら。(T)

表現したいと思っているひとがいて、学生が遊びに来て、美大との連携もあって、制度の隙間にあるからこそ、ここで過ごせるひとがいる。(Y)



たきびつことを始めたのは、秋田公立美術大学の学生らと交えた地域活動の中で、たきびのイベントに人を集わせることのできる可能性を感じたからです。草刈りのときは地域のひとがご協力くださったりと、新屋のひとびとの地域活動に対する受容性の高さやあたたかさを感じています。(T)



生きること、生活すること。それしかない。

安藤先生は、不思議なひとだなと思う。そのひとに合わせ話を、前向きに考えてくれる。どんなこともNOではなく、応じるように、心がけてくれる。(O)



なんだか面白いひとたちだなと思って。表情がそれぞれ違って。おれの存在は、意識していないだろうけれど。(N)

うちのあかりには、息子がお世話になっていて。こうやって、気楽に過ごせる場所って、そうないんです。家に二人きりでいるよりは、ここに來ると人と出会えて、私も考え方が少し広くなりました。自分で歩き出さないと、という意識も出てきて。(O)



学生たちと地域のひとびとが日常的な会話を通して親しむ場でもある

うちのあかりに最初に来たとき、僕はコテンパンに拒絶されて。挫折しかけたけれど、ここで辞めたらダサいから、根性で関わっていきうちに受け入れてくれて、めちゃくちゃ面白くて、誰よりも分かり合える仲になった。彼は言語的なコミュニケーションはとろうとしなくて、でもそれに慣れてくると、そのほうが自分も落ち着いてくる。そんな、なんでもない時間を一緒に過ごしたいと思う。(S)





誰かひとりでも、自分のことを

聞いてくれる人がいたら、生きていける。

その仮説を実証していくのが、うちのあかり

写真=伊藤靖史
Creative Peg Works

安藤 うちのあかりは地域活動支援センターなのでソーシャルスクエアさんとは制度が違って、でも結構、重なるところもあって。ソーシャルスクエアさんに行っている方がちよっとうちのあかりに来たりとか、うちのあかりに来ている方が、次のステップとしてソーシャルスクエアさんに行きたいっていう方も多くて。

奥田 ソーシャルスクエアは全国に福祉施設を展開していて、何らかの障がいのある方が企業に就職するためのサポートを行っています。ちや混ぜをキーワードに、障がいや年齢や国籍に関係のない社会を作っていこうとイベントをしたり、「ちや混ぜタイムズ」というフリーペーパーを発行したりしています。僕は10年ぶりに地元・秋田に戻ってきて、秋田山王店を立ち上げたという経緯です。制度としては訓練のニュアンスが強い施設で、うちのあかりさんはどちらかというと居場所のニュアンスが強いかと思います。

田村 秋田公立美術大学が設置したNPOで働いている田村です。これまで福祉関係の仕事をしたことはないんですけど、安藤先生からお声掛けをいただいて、今「たきびっこ」というのをやっています。うちのあかりの活動と、うちのあかりに来られる利用者さん以外の地域のかたがたも来る緩衝地帯のような場として、月に1回たき火をする場を設けています。

KO 僕は中通でORIENTATION FOOTWEAR ORIENTATION RECORDS&GOODSというグッズとレコードのお店をやらせていただいています。もともと靴販売においてフィッティングが一番大事と考え、足にトラブルを抱えた人の悩みを聞いて、靴の紹介とか、一緒に買い物に行ったりとか、インソールを調整するなどをメインでやっています。OVOさんから紹介いただいて今ここに来ているんですけども、うちのあかりさんはすごく素敵な企画をされるのでお話を伺いたくってきました。

OVO うちのあかりには、秋田市から受託している〈はだしのころ〉という展覧会があって。コロナ禍で実展示ができなくてウェブ展示をしたときに、ここに通所している平川慧くんっていう、点描をずっと描いている子とか、はじめさんと安藤さんの音声インタビューなどをやって、それがきっかけでうちのあかりに関わることになりました。僕は脳梗塞で左まひになって、後天的に障がいを持つことになったので、それで引き寄せられたというか。僕自身、自分の日常生活でマイノリティーだなんて感じるものが多かったんですけども、うちのあかりに来ると、自分がリハビリセンターに入院していたときのような、自分がいてもいいなっていう感じもあって。今は、自分と近い病気の長浜谷さんっていう、脳卒中で片まひのカメラマンの人の送迎をしたり、〈はだしのころ〉があるときにむくむくって背筋が伸びて計画し始めるみたいな感じで関わっています。

安藤 私自身、誰かひとりでも自分のことを聞いてくれる人がいたらよかったのにも思った時期があって。私は焼き物をやっている、個展をする中で、ギャラリ―の人だったりお客さんだったり、いろんな人と作品を通して関わられて、自分っていうものを聞いてもらったという実感があった。仮説として、誰かひとりでも、あなたはこういう状況なのねとか、あなたのことを聞かせてよという人がひとりでもいたら生きていけるんじゃないかと思っ、そういう居場所をつくりたいと。その仮説を実証してみたかったというのが、うちのあかりの始まりです。

それと、支援学校の教員を1年やったことがあって。特別支援教育って大事なものですけれど、私がいいた状況や私の幼さもあってすごくしんどくて。あのときの怒りみたいなもの、自分が何もできなかったということも原動力になって、学生たちやスタッフと一緒につくってきたんだと思います。この場所に来る前は

奥田峻史
SOCIALSQUARE
秋田山王店スクエアマネージャー
社会福祉士
フォトグラファー

田村 剛
NPO法人アーツセンターあきた
ディレクター

KO
ORIENTATION FOOTWEAR
ORIENTATION RECORDS&GOODS
DJ

OVO (nost)
レコードカッティング作家

安藤郁子
NPO法人アーツリンクうちのあかり代表理事
秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻教授
陶芸制作・ソーシャルアート





地域活動支援センター「アートリンクうちのあかり」。
日々の記録を書いたり、描いたり。切ったり、塗ったり、句を詠んだり。
白い壁は、日々の制作で埋めつくされている

学の構内で1カ月に1回、そのあと小さな家を借りて、そして今ここにきていて。日々問題だらけの中にあっても、「だからやめられないんだよなあ」みたいなこともあったりして、何とか続けています。

地域の中で、自然な状態で、確かにここに存在すること

安藤 今日は「地域にひらかれた福祉施設」について、それって何？というところ？というのを伺えればと思っただけです。地域にひらかれていくこと、その必要性などいろいろ考えているんですけど、利用者の方一人一人が生きていることとうちのあかりの在り方とはまた別で。でもたきびっこをやっているうちに、地域にひらかれるというよりは、地域の中で自然な状態にあることの必要性みたいなものはすごく感じて。でも、それが何なのか全然分からない。たきびっこをやりながら、それって何なんだろうっていうことに悩みながら、でも必要性を感じながら続けています。地域の方とつながりができた一方で、放っておかれたとか、何していいのかわからなくてもう行かないっていう声もあつたりして。何にかあって、何をしたい、今、何がしたいのかとか、地域との関わりで何ができるのかとか。そんな中でこの新屋地域で、何かすごくいい動きが起これたら、それがいろいろな所に波及したらいいなと。何もできていないのに、夢だけは大きくあつたりしています。

うちのあかりは日々問題がたくさんあって、生きていくこと自体が大変だったりして。でも、そういうところとか、現在地みたいなことを自分たちでも確認しながら、未来に向かって進められればいいなという気持ちです。

奥田 うちのあかりさんは、「地域との接点をつくっている」というイメージがあるなど。たきびっこの活動も、たきびっこっていうものを通じて地域の人たちとの接点をつくっているというイメージがあります。地域にひらかれた場ということを考えてときに、誰がひらいているのか？が大事だと思っただけで。地域でいろんな場をひらいている人たちはたくさんいるけれど、福祉施設とか障がいのある方に対応している所が地域にひらく、接点をつくるということが地域にとって大事なんじゃないかと思えます。いわゆる一般の障がいのある方が何かのコミュニケーションに入ろうとしたときには、不安なことが多いと思うんです。受け入れられるのかなとか、自分のことを理解してもらえるのかなと思っただけで、福祉に携わっている人たちがその場をひらいていくのは大事だなと。

福祉サービスって障害者手帳や診断書が必要になるんですけど、そういうことに抵抗を感じている方もいらっしゃる。結果、サービスを利用しないケースもある。その方の人生を考えたときに、ほんの2〜3年では完結しないこともたくさんあつて、サービス利用に至らない

方でも関わっていきけるような機会として、そういう場の提供もしています。行って安心できるような場所が地域にいくつかあるというのが、その地域にとって大事なのかなと。うちの場合は就職支援をメインにやっていますが、うちのあかりさんみたいに表現したいなところを大切にしている所が地域にひらいていることも同時に大事だなと思えます。いろいろなバックグラウンドのある方が地域にひらいているということが大事なポイントかなと捉えていますね。

安藤 なるほど。うちのあかりをひらくというよりは、もともと誰でも来ることのできる場所があつて、そこにうちのあ

かりの人も行くみたいなニュアンスのほうが私の中で今は近くて。だから接点をつくるというのは、まさにそうだなと。ここをひらくとか、この中にいる人たちをひらくというよりは。

世の中って一般常識みたいなのがあつて、そこから外れていると困った人として扱われたりして。ちょっと待って、というのはいすごくあつて。例えば、学生がマシュマロを焼いて盛り上がっている。こっちは身体に障がいのある人が、焼いたマシュマロを食べている。別に接点はないけれど、同じ場所にいる。そこには音楽をやっている人がいたり、何かを作っている人がいたり。何となくそういうふうにして、お互いを知るような場所になるという思いがあります。



OVO 人がいる所が好きならいいけれど、僕はまだに人がいっぱいいる所は苦手。でも、何かをやっている、そういう気配は好きなんです。何かが行われているけれども、遠くから見ている、静かに、その景色を。みんな楽しんでるにしているなっていうのを楽しんでいるパターン。だから、たきびっこみたいなことが行われているのは、新屋という地域の中にあるというか、関わっているなと。ただ僕は田村さんとかたきびっこをやっている、ちょっと大変そうだなと思っただけで、片付けとか、雨のときとかもあるし。服は着替えなきゃいけないし。ずっとやっているのがすこいと思いません、正直。

田村 自分は、目的に対してどういうことをやるのかと考えがちなんですけど、たきびっこに関しては、いろいろな人が立ち寄れる場にたき火があれば何かできるんじゃないかというのが最初の一步だったんです。行ける場所が増えるといいのかなという感じで。行った先には違う人がいるから、行く人は違う人に出会っていきつつ、そのパリエーションが世の中に増えると地域としては良くなっていくんじゃないかなと。そうすると、話を聞いてもらえるかもしれない先が増えていくのかなっていう気はしているんですよ。

続けていくことが重要なので、やることをめっちゃミニマムにしています。準備は30分くらいで、片付けも1時間からならなくらいでできるようになってきて、学生もどんどん鍛えられてきて。告知に一生懸命にならずにやり続ける方法をつくっていくと、イベントというよりは地域行事。毎月の地域行事っぽくやっていければ、もしかしたら浸透していくんじゃないかなというもくろみみたいな感じですよ。

OVO 意外と気付かなかったけれども、同じことをやり続けるというの間にか祭りっぽくなっていくんじゃないかなと。行けなくてもなんか安心するというか。たきびっこも、「ああ、きょう、たきびっこやってたんだ」「みんなあれ食ってるのかな」とか。そういうのが増えていけば、革新的なことばかりやらなくてもいい。

の仕方は違うけれども、近いんじゃないかなあと思って。ダウン症の子とかは天使みたいな子が多いからすごい乗るし、支援学校でDJをする人も恥ずかしがらずに踊るし。お互い、ああ、この人、こういうふうにするの、踊るなあとか。地域にひらくというのは、僕はなんとなくそういうことなのかなと。

KO ヒップホップって、初めは勝手にやっていたものが文化になって、文化が波及して、世界中にいろんなヒップホップがあつてというのが面白い。もともと自分たちで楽しんでた文化、マイノリティーとか社会的弱者の人たちのカルチャーが波及していくっていう。

安藤 私自身も自分がマイノリティーみたいな実感はあつて。自分の性格もあるんだけど。でも、そこに場所があつたり、自分を出している人がいたりしたら、出してみようかなとか。私にとってはそれが個性だったわけだけど。一人一人、もしかしたら、すごく頑張ってる人と合わせているのかもしれない。マイノリティーの人が楽しそうにやっているのを見たら、ふと自分の中のマイノリティー性みたいなものが呼び覚まされたりとか、そんな時間になったら、きつといいですね。話が飛んじゃうかもしれないけど、自分の中の野生的な面というか、そういうものがふと解放される場所に、結果的になつたらいいな。でも、それも無理せず。そうしなきゃみたいと思うと、押し



「たきびっこ」は、新屋地域の中心である表町通りにある新屋ガラス工房の裏手、日新保育園跡の空き地で行われている。「うちのあかりの人も、地域のかたがたも訪れる〈緩衝地帯〉のような場」と田村

KO 僕、DJとしてイベントをしていて、定期的にやっていると、それが普通になっていくんですよ。たまに大物のゲストDJがいたりスペシャルなことあるんですけど、でもイベントとかパーティーっていう箱自体は変わらないので、それがだんだん普通になっていく。それこそ、あ、明日パーティーだよ、レギュラーのパーティーあるよねとかいうふうになっていくと、特別視は薄れていくと思うんですね。なので、あまり特別視しないで、今やっていることをやるのか、それをそ街に絡んでいくのか、街の中に入っちゃうとかのほうが好きで自然じゃないかなと思います。

自分の中のマイノリティーが呼び覚まされる場に

安藤 雑に言っちゃうと、普通っていう感覚自体をなくしたいっていうか。みんな一緒だよ、みんな普通だよっていう感覚をなくしたい。みんな違うし、同じって言ったら同じだし、違うって言ったらめっちゃくちゃ違うし、いろんな人、いるよねっていう感じにしたいから。人が見て、すごいことしているねという感じじゃなくて、ささやかだったり、少数派しかいなかったりとか。だけど地に足が着いていることに惹かれちゃうっていうか。

OVO 差別を受けてきた人とかが絵を描いたり、詩を書いたりというのは、僕は同じようなものを感じるんです。表現

付けがましくなるし、自然にそういう瞬間が生まれたらいいなぐらいでいいのかなと思ったり。

OVO たきびっこって、いろんな人が入り交じって、外というだけあつて圧迫感もなく。

田村 そうなんです。そういう場はあつたほうがいいなっていうか、こういう場が好きで。こういう場にいることが苦手な人たちが、できるだけいづらくならないようにできたらいいなというのだけは、ちょっと思います。

OVO 歩いたり、あの坂を上がったり下がったりして、コーヒー飲んだりして。

田村 そう、散歩したりとか。あと、火をいじってれば、火をいじっているんだなってみんなから思ってもらえるんじゃないかなみたいな。

奥田 たき火って、最悪、話さなくてもいいじゃないですか。話さなくてもやることあるみたいなことっていいですね。人にどうい背景があるのかって、多分、ちょっとずつ見えてきて、それが当たり前になってくるのかなというところがあつて。そういう意味ではたきびっこを継続していくことには意味があると思うんです。ちょっとでも関わり続けていくみたいなことができればいいなっていうふうに思います。



うちのあかりをつくった理由を、そのままやっていければいい

安藤 うちのあかりがというよりは、地域が、あるいは自分の周りが、こうなっているっていいなみたいなことはありますか？

OVO うちのあかりは、ある意味、サードプレイスの役割ですね、多分。斜向かいのアトリエはこじんまりとしているから、静かに、1人になりたい人いい場所。でも（ほだしのころ）はもう9年もやっているから、うちのアトリエ美術館というか、常に見られる場所としてはだしのころ美術館というのがあればいいなと思いました。もう、パワーがすごいから。もちろん、障がいのある人は、作品を作るよりもっと大変なことがめっちゃくちゃあることは、少し関わってて分かりますけども。

安藤 いわゆる美術館やギャラリーより実際に関われるというか、相互の何かがもつと見えるような、そんなギャラリーみたいな、ちっちゃな美術館みたいなのができたらいいなって、私も思います。はじまりの美術館（福島県）に行ったときに、いわゆる美術館とは質が全然違っていて、進んでいるというか。単純に言うとなんか温かい感じがしたんですね。行ったらうれしくなるみたいな。そういう空間がちっちゃくてもあったらいいなあ。

OVO 作品というよりも、その人の意

識とか、痕跡と捉えられたら。

KO それこそ、うちのあかりをつくった理由を、そのままやっていければいいのかなと思います。

OVO 今、めっちゃいいこと言ったから。その始めた理由を続けていければいいんじゃないかなって言うのは、とてもいい。ちよっと、僕は欲深かった（笑）。

安藤 私はささやかなことのほうに目が行ってちゃうんですね。いろいろな方に聞いていたって、助けていたって、でも私はやっぱり陰にいたいなと思ったり。奥田さんは、どうですか？

奥田 他県でいわゆる福祉事業に関わって、秋田に10年ぶりに戻ってきて感じたのは、圧倒的に選択肢が少ないことでした。通いたい施設を探すときに、あまりにもバリエーションが少ないというのがある。選択肢が少なくある状態になってくると、生きづらさを抱えている方たちにとってプラスになるのかなと思います。アート寄りの活動ができるような施設って、そんなに多くなかったり、なくなっちゃったりというのを他県で見えたので。うちのあかりさんが地域にあり続けるというの、大事なことで、ありがたいことだなって言うふうには捉えています。それこそ、福祉施設に限らず、ここからつながる地域の何かって言うのもすご

く大事だと思っていて。福祉以外の所にどうつながっているかという、つながる選択肢がどれだけあるのかって言うのが、大事なところなんです。

差異がなければ、変化は生まれない

田村 生きていくのに、やっぱり練習は必要で。練習して、自分に合った方法みたいなものを見つけたらいいなと思うんです。いろいろな場があって、世の中に出ていくときの練習の場みたいな使い方ができたら、自分も含めてですけど、生きていくときに少しくまくなっていくっていいか。それによって自分のことが分かっていくって言うか。そういう場所が増えていくといいなという捉え方をしています。

OVO その練習って言うのは、「若い」とかも入ってくるんですか。だんだん年もいってきかなくて、何となく、だんだんみんな、よし、やってやるぞみたいな若い頃の感覚がなくなってきた。僕は脳梗塞になって、早めにそれが来たみたいな気持ちがあった。何て言ったらいいんだろかな、うまく言えないな。若い練習。老人になると障がい者になる人が圧倒的に増えるから。そういう練習とはちよっと違うかもしれないですが。

安藤 そうそう。うちのあかりに来る人って、例えば、学校時代がすばつと抜けていて、明らかに練習期間がなかったから、その経験を経ないでいきなりここ行

ってください、みたいになっただけで、そりゃ無理でしょう。うちのあかりは、地活だからこそできることはあって。練習はいろんなことにおいて、ちよっとずつ、若いもちよっとずつ、老いの足跡を聞きながら、練習しているっていいか。

OVO 僕はたまたま、こういう体になつたから感覚が分かりますけども、逆に言ったら、安藤さんとか皆さんとか、体がめっちゃくちゃ悪いか、後天的に障がい者になつたっていうことではないのに、こういうことに関心があつて関わったりして。それって結構、僕の中ではすごいなと思います。多分、僕が自分がかうなつていなければ全く関わることにならなかつたです、多分、一線を引いてしまふ人側にいたと思うんですね。

安藤 大き過ぎる差異は変化を生まなくて、でも差異がないと変化を生まないうこと、適度な差異があるときに変化が生まれるっていうのを聞いたことがあつて。だから、練習でちよつとずつ、いろんなことに触れることができるっていう場所。うちのあかりがなければいいなと思います。いろんなプロセスがあつたり、作品を発表して、それを見てくれる人がいたりして、そういうのも全部含めて。対話というか、対話としてのアートというか。そこはすごく、うちのあかりを考えたときには大事にしていきたいですね。



「アートルックうちのあかり」から、いろいろな人が交差する「たきびっこ」や「旧石野呉服店」、ひとりで制作と向き合ったり、語り合ったりと静かに過ごす「斜向かいのアトリエ」。小さな新屋地域に、さまざまな場が展開していく



うちのあかり事業報告2024

デザイン 越後谷洋徳

編集 高橋ともみ

企画・制作 NPO法人アーツセンターあきた

助成 日本財団

発行 NPO法人アートリンクうちのあかり

秋田市新屋比内町11番16号

<https://utinoakari.com/>

表紙 戸賀瀬友宏

Supported by  日本財団 THE NIPPON FOUNDATION